



Photo: 松田純一

壺中天公演  
 「忘れろ、思い出せ。」  
 振舞・演出・美術：村松卓矢  
 2013年3月15日～24日  
 会場：壺中天



## ニューロンの森で遊ぶこと text 田中 伸子

大駱駝艦の家長は言わずと知れた鷹赤兒だが、その傍らで男組をまとめる長兄役と言え、そう、入鑑19年の村松卓矢だ。

多くの鷹の子どもたち(表現者としての)が鷹の背中を仰ぎ見てその足跡を辿ろうと模索する中、アニキ村松はあるべき舞踏との関わり方を、作品を通して提示し続けている。キャリアを積んでなお、誰よりもアヴァンギャルドに、臆することなく想定外の領域へと足を踏み入れ、そのために起こるアクシデントを大いに楽しんでみせるのだ。

村松は08年のアメリカ公演の際に地元新聞の取材に対し、鷹の言葉を引用しながらこう答えている。「舞踏の中に舞踏を見つけることはできません。それを見つけるためには外にいなければなりません。舞踏は自分自身の内側、自身の歴史から探し出すもので、結果出てきたものが猥雑でオドロドロしいものであったとしても一向に構いません。……そこで私は舞踏からなるべく遠ざかろうと日々努めています、それでも(できあがるものは)舞踏にかわりません」

そんな村松が今年3月に吉祥寺のスタジオ壺中天で発表した最新作「忘れろ、思い出せ。」では、かつて自身で語っていたように、自らの内側、脳内へと入り込み、舞踏の心臓がある死の淵、そしてその対極にあるヒトの起源を探ることを試みていた。

オープニング、静寂の中でゆったりと揺れる男ダンサー7人。重低音のピアノと電子ノイズミュージックが始まると活動を開始、画一の動きから次第に各々で自由に動き回るようになり、細胞分裂のように活性化し、ヒトの営みを体現し始める。そんな彼らの背後から静々と登場する村松は「ヒトはどこから来て、どこへ向かっているのか」、「進化の過程で何を忘れ、何を記憶として残したのか」、「600万年前、類人猿からホモサピエンス=考えるヒトへと進化した人類が思考するがゆえに日々繰り返す可笑しくも愚かな日々をお見せしましょう」と言わんばかりに客席を正視する。

次に続くのが今作の目玉、縛縛りのシーンだ。太いロープに村松が吊るされ、自由を奪われ操られるプチ拷問、さらには同じくロープを使っただの自演首つりショー、とそのオフリミット手前ギリギリのパフォーマンスで観客の予測の壁を一気にぶち壊す。自演首つりシーンでは自ら己を締め上げるというなんとも荒唐無稽な身体をはった表現でヒトの矛盾、不条理さを描き出している。髪を整え、ジーンズを履いた現代人——プログラムでは「戦な男たち」となっている——はパンツをはいたサル(ヒトとしての理性を有する生き物)として描かれ、道具を器用に操っていたと思いきや、後半シーンではその道具に振り回され、文明に踊

らされ力尽きる。

このように、人類規模の記憶の話として大きな広がりの中でヒトを解き明かす一方で、それだけでは終わらせないのが村松作品。記憶の構造と観客一人一人の日常とを具体的に結びつけることによって作品を一気に身近な事象として観客側へと引き寄せる効果を上げている。それが顕著に表れるのが中盤で各々が自己紹介を始めるシーン。ヒトが無自覚に選ぶ記憶の選択を聞くうちに、ヒトという不完全な動物の欠陥部分、つまりはコンピューターとは違った人間らしさに苦味が溢れる。そして、この記憶の一連が我々の、ひいては一人のヒト、村松の記憶の話なのだ気づかされる。

舞台いっぱいには広げられた赤い綱目は、脳を構成するニューロン(神経細胞)の繋がりを表しているのだろう。エンディングではその綱目越しに村松が出会った人々の顔を回顧しながら(それほど悪くないじゃないか、生きていくことも)と一人笑みをうかべて生きていることを慈しむ姿を静かに目撃することとなる。その子どものような、もしくは記憶から解放されたボケ老人のような笑顔を見つめ、我々もそれぞれの人生を振り返り、またDNAに埋め込まれた人類の記憶に思いをはせながらチェーホフの「ワーニャ伯父さん」のソーニャのように「仕方がない、生きていかなければ」と悟るのだ。